

## 太田の日本の歴史考察

縄文時代（－16500年から－1000年頃）、弥生時代（－1000年から300年頃）の遺跡も数多く出るということは、古くからここには人が住んでいたということがわかります。

（伝説の中で）弥生時代中期（－660年）第1代神武天皇より日本の天皇制が始まり弥生後期の始まりの頃（－97年）第10代崇神天皇。卑弥呼（175年から248年）の時代が第14代、15代天皇の頃と伝えられています。

第16代仁徳天皇から始まる古墳時代（350年から700年頃）には、ここ太田の地はすでに400年の前から王族の勢力が、ここを治めていました。（毛野国）

卓越した巨大勢力を持っていたことは天神山古墳の（その建設時は450年前後、全国で26番目）大きさでわかります。

もちろん東国では1位その創建時の100年間では日本で一番大きい規模を誇っています。日本一繁栄をしていたのではないかと想像ができます。

この頃ここを毛野国と呼んでいました。大きい範囲の総称でした。米の取れる国という意味です。

450年頃、（上）毛野君氏（かみつけぬのきみ）小熊（オグマ）という君が居ました。この人は

（伝）崇神天皇（第10代天皇-97年から-30年）の皇子でる豊城入彦命（とよきいりひこのみこと48年、上毛野君・下毛野君の祖で東国の統治に向かった人）

の500年後の末裔といわれています。天神山古墳に埋葬されている人ではないかと思われる人である。

大きい国、毛野国の最大権力者であったようで、毛野国は400年くらいまでは巨大地域統治から、その後は同族の中で力を持ちながら連合統治を行っていく。

450年頃、上武蔵野国と下武蔵野国（同系の民）の内紛があり、下武蔵野国は異系の民ではあるが、その時の統治者である連合勢力の国である上毛野国の王に応援を頼み、上武蔵国は朝廷に応援を頼むという形となり、代理戦争という形となりました。朝廷側が勝ち、ここも朝廷の支配に入ります。その後は上毛野国、特に太田市の近隣には大型の古墳は作られず、武蔵野国に大型の前方後円

墳が作られるのを見ると朝廷により勢力が分散させられて、勢力は武蔵野国（埼玉古墳群）のほうに南下したり、上毛野国も太田市周辺から前橋市高崎市周辺と西進したりと勢力が分散移動していく。東国全域に広がっていくきっかけになったと思われます。

勢力が分散する前、その中心に位置しているのが天神山古墳で、造られたのが、5世紀半ばということは450年頃と考えられます。ここに葬られている主（小熊）が毛野国の最後の首長と考えられる。最後にしてこのような巨大古墳は、勢力がなくなってからでは造営されない。つまりこの時期には最大の権力と勢力がありながら、突如2地区に分断されたと考えられる。周辺の事実から考えると、朝廷との戦いで負けたのを契機に朝廷から分断され、同族同士で、牽制をしあうように両者を監視下の下に置き、東国に巨大勢力を発生させないようにしたのではないか。また女体山古墳もおなじ頃の造営で、両者は緊密な関係があること。2つがこの時期に出来るということは、その勢力の大きさを想像できるが、女体山は小熊の妻か。いずれにしても、毛野国の中心がここ太田の地に在ったことは間違いありません。